実践レポート

居場所があり、安心感のある学級づくりについて

－声を出すことを通して子どもたちの自尊感情を高め、主体性を育てる－

高松市立下笠居小学校
教諭　　品地　沙由理

１　はじめに

本年度本校に赴任し、担任した児童は、子どもらしく、素直で大変優しい子どもたちであった。一方で、話すことに抵抗のある児童が多く、自信がもてず自尊感情の低さが課題として感じられた。教師に対して丁寧な言葉で話し、自分からあいさつはできるが、声が小さい。授業では反応が返ってこないことが多かった。不登校傾向の児童もいて、何とか登校しても、頻繁に保健室を利用していた。

そこで、私が学級経営で大切にしたことは、学級に居場所があり安心感があることである。これは、自尊感情の高まりにつながるはずである。楽しいと思える学級にし、４年生という活発な発達段階を生かして進んで行動できる力を付けたいと考えた。高学年を見据えて育てたい力でもあるが、急激な変化への対応力が求められる時代を、主体的に生きるために必要な力でもあると考えたからである。

２　実践の内容・方法

（１）声を出す機会を増やす取組

国語の音読単元を声を出すきっかけにした。「こわれた千の楽器」で楽器たちの心情を読み取り、楽器たちになりきってみよう、少し離れた隣の学級や職員室まで響いてるかもと声をかけると、初めは恥ずかしがっていたが、次第に大きな声を出す児童や、立ち上がって動作をつけて読みだす児童が数人現れた。それを称賛すると、次々と広がり、音読発表会は校長先生にも来てほしいと言い出し、招待した。音読発表会が、子どもたちの自信につながったように思う。

しかし、音読が終われば、いつもの消極的な児童に戻った。せっかく声を出す楽しさを知ったので、授業前後のあいさつに生かすことにした。継続することでいつしか歯切れよく、声のそろったよいあいさつが定着した。「最後に小さい『つ』を入れて、それが聞こえるようなあいさつにしてごらん。」という指示が子どもたちには分かりやすかったようで、一気に声の大きさや歯切れのよさが変わったように思う。

全員でそろえて声を出すことはできるようになってきたが、個人となるとなかなか難しかった。そこで、ノートにめあてやまとめを書いた児童から読むルールを取り入れた。声の出し方だけでなく、漢字の読み方も個別に指導できる上、書く速さを意識したり、集中が途切れがちな児童が、周りと同じペースで書いたり読んだりできる効果もある。言い間違いやすい言葉や暗記させたい言葉もゆっくり言って確認した後、「３回どうぞ」、「５回つぶやこう」と指示し、繰り返し声に出すようにすることで記憶に残り、間違いが少なくなった。

暗記させたい言葉については、朝の会に組み込んだ「口の体操」も効果的である。算数の用語など、学習した内容をＡ３用紙に印刷して掲示した言葉を声に出して読む時間である。なるべく短く、リズムよくしているので、毎朝読むことで、暗唱でき

るようになる。記憶に残りにくい児童もいるが、毎朝友達の声を聞くことで効果があったと思われる。算数のわり算や確かめの仕方は、一年を通して何度も出てくる。５月に暗唱できるようになっていたことで、出てくる度に自信をもって答えていた。暗唱まで至っていなかった児童も、繰り返すうちに次第に覚えているようであった。算数の県版テストでは、最初の知識を問う問題の解答率が高まった。毎朝の声出しで暗記できたためだと思われる。

・わり算は、
たてる、かける、ひく、
おろすのくり返し。
・あまり ＜ わる数

【５月　１けたでわるわり算】

・わり算は、
わる数×商＋あまり＝わられる数
で、たしかめる。

【１２月　百人一首の世界】

①嵐吹く三室の山のもみぢ葉は
龍田の川の錦なりけり
能因法師
②春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふ天の香具山
持統天皇

（２）自分の意見を表出する場を増やす取組

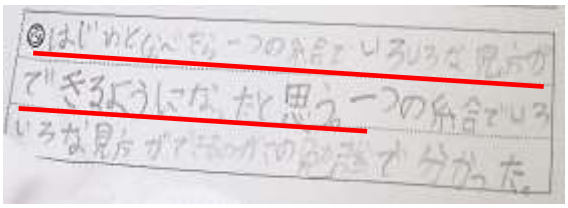
１学期当初、授業中の発言はいつも同じで、数名の児童だけであった。授業に全員が参加している状況とは言えなかったため、発表回数の目標を設定した。１日３回から始め、「発表のチャンス」として、誰でも答えられる発問を交えるようにした。達成する児童が増えてきた２学期からは目標を５回に増やした。

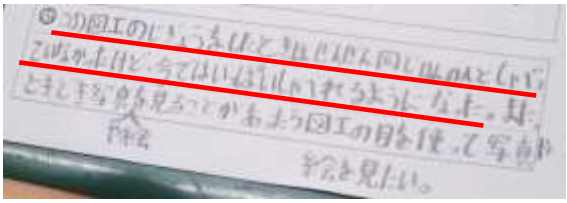
発表となると抵抗がある児童もいるため、「せーの！」で指で数や考えを同時に示す方法も取り入れた。自信がなく発表には抵抗がある児童も、それならできると前向きに授業に参加した。中には、友達を見てから示す児童もいるが、それでもよいと考える。指摘しない方が、意見を表出しやすく、授業に参加できるためである。今では、抵抗のあった子どもたちの方から、「せーの！でやりたい。」と、自分から意見を言うこともある。

１０月の校内研究授業では、図工「ポーズのひみつ」という鑑賞教材を扱った。造形的視点を根拠に、作品について自由に語れるようになってほしいという思いからである。「図工に答えはない！」が子どもたちの中で合言葉になったことで、不安要素がなくなった。美術作品を鑑賞した際には、作品中に描かれているものから想像を広げて感じたことを付箋に書いて交流した。同じ意見には「なかまシール」をはって自信がもてるようにし、シールがなければオリジナルの見方ができた証拠だと価値付けておくことで、積極的に話すことができ、今までにないほど意欲的に取り組めた。子どもたちの振り返りにも、「見方が広がった」、「話せるようになった」と書かれており、自身の成長を実感できたようである。また、恥ずかしがって実際に美術作品と同じポーズをとってみることまではしないだろうと予想していたが、声を掛けると、同じポーズをとることまで楽しんでいた。

【気付いたことを付箋に書いて貼る様子】

【ポーズをとる様子】





【子どもたちのふり返り】

（３）主体的な活動を支え、自信をもたせる取組

年度当初から、係活動の中にサプライズ係を作った。友達の誕生日までにこっそり準備してお祝いするのが主な活動である。誕生日から逆算して計画したり、いつまでにプレゼントを作ってほしいかを一人一人にこっそり知らせ、全員に伝えたか、プレゼントが集まったかなどを確認したりすることで運営力が鍛えられていた。

【封筒に手紙や折り紙のプレゼントが入っており、帰りの会で歌とともに渡した。】

２学期の中頃までは誕生日に関する活動が中心だったが、その経験で自信をつけ、２学期後半から、毎日ホワイトボードにクイズを書き、楽しんでもらう活動が加わった。２月には、係の他に数名が一緒になって節分の豆まきイベントを企画・運営するまでになった。私は全面的に子どもたちに任せてみようと、時々進捗状況を確認する程度にした。子どもたちは安全面や片付けのことまで考えて、軽く丸めた新聞紙を豆の代わりにする計画を立てていた。事前に黒板を飾り付ける児童や、鬼役をする児童も自分たちで分担し、豆まき後はカーテンに鬼の面を取り付けた的当てゲームも考え、楽しいひと時を過ごすことができた。

児童会からあいさつ運動の募集がかかり、張り切って登校した日のことである。応募児童があまりに多く、参加を断られ残念そうな子どもたちの姿があった。教師の「何かできたらいいね。」の一言で、「４－１あいさつ列車」が始まった。あいさつをしながら校舎内を回る活動である。恥ずかしがって声は出ないかなと予想していたが、元気な「おはようございます！」の声が教室に帰ってきた。「１～３年生の教室を回ってきた」、「今日は５年生も参加してくれた」と満足そうな報告があった。自分たちが考え、発信する取組でここでも自信をつけたようである。

【あいさつ列車の看板を作る様子。参加人数が増え、最終的に２号車までできた。】

３　実践の成果

何かと声に出す活動を取り入れたことで、様々な成果があったと実感している。

まず、純粋に声が出るようになった。それは子どもたちも実感しているようだったが、数値として自覚させようと、２月上旬、体育館で騒音計を用いて声の大きさを測る「大声大会」を開催した。結果として、全員が 70～80 デシベルの声を出すことができた。

次に、学習に前向きに取り組めるようなった。国語「百人一首の世界」では、十首の暗唱を目標にしたが、「口の体操」で毎朝声に出していたこともあってか、多くの児童が早々に合格した。そのため、歌人の名前を指定するので、その歌人の歌を暗唱するように課題を出したところ、２０名中１７名もが挑戦した。残りの３名については、その課題に取り組むことは難しかったが、十首の暗唱は合格することができた。学校評価アンケートの「あなたは進んで授業に取り組んでいますか。」の項目においても、１学期末と学年末の結果を比較すると、「とてもそう思う」と答えた児童が 20％から 60％になり、学習に前向きになったことが分かる。

最後に、不登校傾向の児童については、昨年度、２０日間欠席していたが、今年度は１日のみの欠席となり、激減したと言える。遅刻や登校を渋って目を腫らしてきたり保健室を利用したりすることも一切なく、むしろ、朝、教室の鍵を職員室に取りに来る日もあるほどで、あいさつ列車にも毎日参加している。

４　普及させたい取組と期待される効果

声に出すことの有効性は大きいと常々感じている。特に「口の体操」はすぐに暗唱できるようになり、即効性がある。覚えると、声の大きさも比例するように大きくなり、「できた！」の積み重ねが自尊感情の高まりにつながる。時には、声をそろえる場面で言い間違えたり、タイミングがずれて失敗したりすることもあるが、「そんなこともある」とお互いに気にせず笑って流せる雰囲気づくりにもなった。失敗しても大丈夫だという安心感があってこそ、子どもたちは自分たちで考えた活動に主体的に取り組め、そこに自分の居場所を見付けていくことができると言える。

声に出すことは発信することである。初めはただ読むだけだが、それが主張になり、主体的な活動へとつながった。この先には自己実現に向けて、主体的に取り組む子どもたちの姿があるものと期待している。

５　課題及び今後の取組の方向

今後の課題としては、今年度子どもたちが培った力の継続である。学級編制も控え、５年生への進級を楽しみにするとともに不安を感じている様子がうかがえる。４年生当初のことを考えると、ともすればまた遠慮しがちな彼らに戻ってしまうのではないかと危惧される。担任や友達が誰になろうと、それに関わらず活動できることが真の力である。そのために、この取組を学校全体に広げ、継続して行っていきたい。そして、子どもたちから発信する取組を、学校全体、地域へと広げていければと思う。

本校は小規模校で、なかなか大勢を前にする機会がない。コロナ禍の影響もあり、元気いっぱいの低学年の時期を、声を出すことを制限されてきた子どもたちである。そのため、今後はＩＣＴも活用しながら、より自分の思いを表現できる場を設け、自信をもって声に出せるようにしていきたい。